剣と魔法の隙間産業的勇者生活

田丸環

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣と魔法の隙間産業的勇者生活

【Ｎコード】
Ｎ８９３８Ｓ

【作者名】
田丸環

【あらすじ】
魔法剣士ソーマ――それは、ＶＲＭＭＯＲＰＧ『トライポッド・フロンティア』内における仮の姿のはずだった。
中級者ながら「魔法剣士としては」最強という評価も、上位者全てが転職済みという状況が生み出したものに過ぎない。
そんな彼が、ゲームとよく似た世界へ迷い込み、水神の神託を受けて勇者をやる羽目に陥ってしまう。
ゲームより過去というこの世界にはゲーム設定とは異なる点も多く、彼の歩みは順風満帆とはいかなかった。

貴族とのもめ事もとりあえず収まって、第８話より第２章に突入。

第１話　目覚めた場所は水の女神のお膝元

天井のみならず、壁にも、床にも、見覚えはない。
いずれも石造りでひんやりと冷たく、加工や装飾から判断すると非常に工費はかかっているように思われた。
上半身を起こして周囲を見渡した少年は、寝起きのように霞んでいる頭を軽く振った。
彼がいたのは、幅１０ｍ、奥行き２０ｍほどの一室。天井まで５ｍはありそうだ。
「あれはアクアリーネの像？　聖水教会なのか？」
当惑しながら漏らした彼の問いに答えてくれる者はいない。
もちろん、水神アクアリーネの石像も無言のままだ。
「聖水教会なのはいいとして、なんで俺はここに……。いや、ゲームなんかやってたか？」
目覚める前……、正確には意識を失う前の状況を思い出そうとするが、彼はその記憶に辿り着くことができなかった。

彼がよく遊んでいるＶＲＭＭＯＲＰＧのタイトルは、『トライポッド・フロンティア』。
ヘッドギアを被ることで、視覚と聴覚と触覚の疑似信号を脳内へ送り込む方式のバーチャルリアリティ技術は、すでにネットワークを介して多人数が同時参加できるＲＰＧにまで転用されていた。
『トラフロ』はそのうちの一つで、蘇った魔王の軍勢が活動し始めた時代に、かつて魔王を封印した勇者達の武器を求めて多くの冒険者達が世界中を旅する物語だった。
それはともかく、彼にとって一番重要なのは、聖水教会にいつ来たのか。あるいは、誰に連れ込まれたのか。そして、その理由であった。
右手のジェスチャーに応じて、透明なテレビが画像を映し出すよ

うにシステム画面が表示された。彼が見やすいように、読書時に本を開いた距離感と傾きで表示位置を調整してある。
システム画面上でできたのはアイコン表示される所有アイテム一覧ぐらいで、全体マップや現在地という現在欲している情報はほとんど表示されなかった。
「システムの不具合か……？」
後から考えればのんきなものだが、この時の彼はまだ何も知らずにいた。

誰かに事情を尋ねてみようと歩み寄った扉が、内側に向かって開かれる。
不意に現れた少女が驚きで目を見開き、少年の姿を瞳に映し出した。
「……っ！」
「あっ、悪い。驚かせたか？」
思わずして口をついて出た謝罪に理解を示し、少女は気を落ち着かせて問いかけくる。
「あなたは、どうやってここまで入ったんですか？」
「……俺の方が聞きたい。なんで、俺はここにいるんだ？」
どちらも明確な答えを持ち合わせていないようで、互いの顔を見つめ合う。
「ここは聖水教会の礼拝堂で、普段なら一般の方の立ち入りは許されていません。誰の許可も得ずにここまで入ったのですか？」
少女が口にしたのは有益な情報ではあったが、まだまだ核心には触れていない。

「俺はソーマ。気がついたらこの場に寝ていて……、どうしてここにいるのかまったく覚えていないんだ。何か知らないか？」
「えっと……あっ、私は僧侶見習いをしているシシリーといいます。訪問者が来られるという話は誰からもうかがっていません」

見知らぬ人物に対しても、真摯に対応してくれる少女。
落ち着いて容姿を眺めてみると、ふんわりと広がる水色の髪が軽く肩にかかり、幼さこそ残るものの柔和な顔立ちは非常に可愛らしかった。
地味目な印象ではあったが、僧侶という事も考慮するなら似合っていると言えるだろう。

「……なんですか？」
無遠慮な視線にシシリーは怪訝そうに尋ねてくる。
「プレイヤー……だよな？」
「……プレイヤー？」
理解できないらしく、首を傾げるシシリー。
『トラフロ』に限らず、仮想現実型のゲームでは自キャラを格好良く設定する者が多い。自慢できる話ではないが彼自身もまた『ソーマ』を何割か増しで格好良く設定しており、ついでに、年齢も五歳ばかり若くしていた。
逆に言えば、客であるプレイヤーとは違い、ＮＰＣは基本的に平凡な容姿であることが多かった。もちろん、イベントキャラはこの限りではない。

少女のスカートの裾をつかんでめくり上げようとしたソーマの手が、少女の手で取り押さえられる。
「なっ、何をするんですか！」
戸惑いや怒りを滲ませながらも、恥じらう少女の表情は可愛らしかった。
「何って、スカートめくり……」
「失礼でしょう！　どうしていきなり女性のスカートをめくるんですか！」
「……嫌がるかどうか知りたかったから？」
「嫌がるに決まってます！」

怒鳴られた。
仮想現実型のゲームでは、ＮＰＣへの性的な接触は不可能な仕様になっているのが一般的だ。『現実とゲームの区別がつかなくなる』という論調への予防線という意味合いが強い。
その容姿も、その言動も、ＮＰＣらしからぬものに思える。
「やっぱり、プレイヤーなんだろ？」
騙されているという疑惑が抜けず、ソーマの言葉には険が混じる。
「わけのわからないことを言ってごまかさないでください。こちらも教会騎士を呼びますよ」
ソーマの態度に気分を害したらしく、少女も硬い態度で応じてきた。

「……悪かった」
あっさりと折れたのは、謝罪と言うよりも打算による選択だった。ソーマ自身は部外者であるようだし、彼女と揉めるのは得策ではないと考えたのだ。
「どうしてこんな真似をしたんですか？」
「いや……、どんな反応をするのか確かめたくて」
「そのような行動で相手の身分を確かめるのは、あまりに失礼です。二度としないでください」
憤然と応じる少女に、ソーマが首を捻る。
「身分……って何のことだ？」
「貞操観念を見ることで、相手の身分を知ろうとしたんですよね？」
「ちょっと違うけど……、まあ、そんなところ……かな」
曖昧に頷きながら、ソーマの胸を不吉な予感がかすめた。

先ほどの反応といい、今の発言といい、彼女はＮＰＣらしくない。
それでいて、プレイヤーらしくもない。
役割を演じるという意味でのロールプレイングには合致しているが、見知らぬ相手にその態度を貫く意味があるのだろうか？

「……とにかく、さっきも言ったとおり、俺自身もここにいる理由や原因を全く知らないんだ。この教会の中で、誰が俺をここへ運び込んだのか、そのあたりを知っている人間に心あたりないか？」
「それはみなさんに聞いてみませんと……。とりあえず、教会騎士のお部屋まで案内するということでよろしいでしょうか？」
いまさら他の選択肢があるはずもなく、ソーマは頷くしかなかった。

○

礼拝堂を後にして、二人は廊下に出る。
床も壁も隙間なく石が組み合わされており、表面は滑らかに加工されていた。礼拝堂だけでなくどこもこのような作りになっているなら、ずいぶんと立派な建物と言うことになる。
幾つかの角を曲がり、石畳を敷き詰めた中庭の広場を突っ切ろうとした時のことだ。
「……貴様、何者だっ！？　その少女から離れろ！」
誰何する鋭い声が飛んできた。
さすがに自分の事だと察したソーマは、声の主を振りかえって視界に納める。
艶やかな紺色の髪はポニーテールに結い上げていても肩胛骨の辺りまで届いていた。騎士然とした凛々しい女性が、怒りの感情を露わにするような足音でこちらに詰め寄ってくる。
「アストレア様、お待ちください」
慌てて止めようとするシシリーを、当人は怪訝そうに見返していた。
「シシリーの知り合いか？　訪問者がいるなら私達に通してもらわ

ないと困る」
「……それが、礼拝堂でお会いしたばかりで、どのような事情か私も知らないんです。ちょうど、騎士団詰め所までご案内するところでした」
「教会へ勝手に忍び込むとは言い度胸だな。そのような無礼な行動が許されると思っているのか」
「……なんだよそれは」
「なんだ、だと？」
「どうやって入ったかなんて、俺の方が知りたいくらいだ」
どうやら、ソーマがここにいる事情を、シシリーもアストレアも知らないのは確からしい。それはソーマ自身にもわかっている。
しかし、同じ問答の繰り返しに彼もうんざりしていたのだ。自分のことを被害者だと思っているのだから、なおさらである。
「第一、俺が忍び込んだって言うなら、忍び込まれるあんた達の警備に問題があるってことだろ！　人を責める前に、自分の落ち度を問題視しろよ！　あんた達が『誰にも潜り込まれていない』と証言してくれれば、俺の不法侵入なんて疑いも消えるんだからな！」

ソーマの理屈にも一応の正当性はある。
アストレア自身も明言しなかったが、自分達に失態の可能性があるからこそ、事態の究明が必要だと考えていたのだ。
「貴様っ……」
そのため、元凶であるはずのソーマから堂々と追及されては、冷静な仮面も剥がれてしまう。
「盗人猛々しいとはこのことだな。叩きのめされてから牢へ叩き込まれるのが望みか？　目的も手段も力ずくで吐かせてやるぞ」
「やれるものなら、やってみろよ！」
威勢良く応じるソーマ。
ゲーム内でのできごという認識のせいで現状判断が今ひとつ甘いらしい。

彼は怒りにまかせて八つ当たりしてしまったのだ。

第2話　教会騎士はお怒りのご様子

ソーマは腰の左側に結びつけてある革袋の口を開いた。
全ての所持品を収納しているマジックポーチから、ソーマは剣の柄を握って引っこ抜く。
アストレアへ向けるのは、無属性で物理強化のみの両手剣。
「なんだ、それは？」
唖然としたアストレアの視線が向けられているのは、加工を施した『硬化ミスリルソード』ではなく、左の腰から動いていない。
「ん？　マジックポーチだろ。何を言ってるんだ？」
通常のプレイヤーが持ち歩けるアイテム数は３０個まで。それらを収納するためのマジックポーチは、プレイヤーの初期装備とすら言えない代物だった。プレイヤーはもちろん、ＮＰＣからだってそんな指摘を受けたことはない。
「……奇妙な手品を」
「って言うか、マジックポーチを知らないなんて、どんな田舎設定だよ。それともお前が物を知らないだけか？」
ソーマのあきれ顔が本心だと察して、アストレアは羞恥に顔を赤く染めた。

「侮辱する気かっ！」
袈裟がけに振るわれた剣を左にかわしたソーマが、翻った刀身を今度は受け止める。
キン！
甲高い金属音は一回に留まらず、二回、三回と鳴り響く。
ソーマ自身には剣道の経験などない。しかし、仮想現実型のゲームでは肉体の操作が不要なため、反応時のタイムラグもなく、馴れによってかなりの速度で動けるようになる。
それを知っているソーマはできて当然と受け止めていた。

アストレアの剣をかいくぐり、ソーマの剣がアストレアの腹部をしたたかに切りつけた。
柔らかな肉を裂く手応えと、ぬめるような粘液の感触。
『トラフロ』に登場する生物は戦闘時にオーラを発するという設定で、通常の攻撃では傷つかないのが仕様となっている。簡単に血が流れては、批判の対象になるからだろう。
手加減すれば無傷のまま体力も削れるが、非戦闘状態の相手に不意打ちを行えば殺すことも可能だった。
「剣だけでも俺の方が上だな」
本来、ソーマの斬撃は剣士特化型に比べて威力が劣る。
ソーマとアストレアの間には、実力差があると考えてよさそうだ。

「くっ……。まだ、負けたわけではない」
右手で押さえている左脇腹から、小さな赤い霧が立ち上って蒸発していく。自分の体力を代償に治療する『トラフロ』の効果エフェクトだった。
「俺は傷が治るのを待ってやったんだぞ。本当に続けるのか？」
「無論」
ためらうことなく反駁されてしまい、ソーマの方が戸惑った。
自然治癒するため戦闘に対する忌避感はないものの、殺してしまうのはＮＰＣであっても後味が悪い。
困っていたソーマは、ある意味で助けられた。一人の乱入者によって。
「氷結（フリーズ）魔法」
魔法による奇襲を受けて、左腕を凍りつかせながらソーマの身体が右側へと倒れ込む。
「教会内で騒動を起こすとは、何のつもりだ！」
新しく現れたのは、アストレアと似た服装の青年だった。
右手には青い光を放つ直刀をぶら下げている。

「カリアス！　いきなり魔法を使用するとは……」
「ふん。ならず者相手に剣を交える方が、よっぽど無様な行為だろう。貴様にはお似合いだがな」
カリアスと呼ばれた男は、あからさまにアストレアを見下している。
顔立ちそのものは理知的と言ってもいいくらいなのに、内面が表ににじみ出ていて、酷く歪んだ顔に見えてしまう。
「貴様の尻ぬぐいをしてやったんだぞ。原因が貴様だと言うことを棚にあげて、私を非難する気か？　やはり、平民は躾がなっていないな」
反論を無駄と察して、アストレアは唇を噛んで言葉を抑え込んだ。
「さっさと、その男を牢屋に……」
カリアスの眼前で、倒れていたソーマが左腕の氷を払い落としながら立ちあがる。
「電光魔法（サンダー）」
今度、魔法を行使したのはソーマの方だった。
掌から電撃が迸り、直撃を受けたカリアスは髪の毛を逆立てて体を震わせる。
「き、貴様ぁ……、よくもこの私に……」
憎悪を込めて睨む相手に、負けじとソーマがにらみ返す。
「そっちからやってきたんだろうが！　勝手なこと言うな！」
職務に熱心そうなアストレアならまだしも、傲慢な振る舞いをしたカリアスへの印象はすこぶる悪い。
日本で生まれた彼にとって、マンガやゲームに登場する『悪役に仕立てあげた貴族』こそが基本的な認識となっていて、カリアスという人物造形はそれにぴったりと当てはまる。
「光の魔法剣士風情がこの教会の中まで潜り込むとは。聖光教会にでも命じられたか」
もの凄い言いがかりまで浴びせられて、ソーマが呆れている。

『トラフロ』における世界設定では、炎神・水神・雷神が人間達を守り育てたことになっており、それぞれの神を崇める聖火教会・聖水教会・聖光教会が存在する。
各教会が教えている魔法には相性があって、火炎魔法は氷結魔法に弱く、氷結魔法は電光魔法に弱く、電光魔法は火炎魔法に弱い、三すくみの状態なのだ。
そのため、洗礼済みの人間は、優位性のある相手に反感を持っている時代もあった。

「聖光教会とは何の関係もないし、お前なんかに見下される覚えもない」
「剣も魔法も使えるからといって、実力者のつもりか？　貴様の浅はかさを私の剣で教え込んでやろう」
「お前だって魔法を使っただろ」
「氷結魔法（フリーズ）はアクアリーネ様より授かったこの剣の力だ。剣の腕だけでも貴様に負けるとは思わなんがな」
カリアスのこの言動は、さっきまでの自分に対する皮肉のように感じ、ソーマは内心で恥ずかしく思えてきた。
「カリアス、やめておけ」
「なめるなよ、平民風情が！　あんな稽古一つで、私より強いなどと思い上がるなっ！」
アストレアの制止は、カリアスの逆鱗に触れたようだ。
「なんだ、あっちが勝ってるのか。だったら、俺が負けることはなさそうだ」
「ふざけるなぁっ！」
激したカリアスは、力任せにフリーズソードで斬りかかった。
とっさに、ミスリルソードで受け止めると、刀身を通じてソーマの両腕に冷気が流れ込んだ。
聖水教会は水の領域となるため、同属性の魔法は効果も強まるこ

とになる。
「ちっ！」
払いのけたソーマは、剣を打ち合わせるのではなく回避を優先する。
「臆したか」
鼻で笑われたソーマは、あらためてカリアスと向き合った。
「電光（サンダー）魔法」
今度の魔法は放出せず、両手で構えたミスリルソードに宿らせる。
帯電して黄色く光る刀身が、チリチリと小さな音を発し始めた。
「なんだ、それは！　サンダーソードではなかっただろう！　剣に魔法をかけたとでも言うのか！？」
「魔法剣士を知ってるんじゃなかったのか……？」
どうも根本的な齟齬があることにソーマは気づいた。
どうやら、カリアスが口にしていた魔法剣士とは『魔法も扱える剣士』のことらしい。
しかし、ソーマの知る魔法剣士とは『魔法剣を使える剣士』のことを指す。
「偉そうなこと言ってたな。今度はお前が魔法剣の威力を味わってみろ！」

剣を打ち合わせた途端に、両者の優劣は逆転した。
水属性にとって、電光魔法は天敵である。
刀身を渡った電撃にカリアスの体力が大幅に減少していく。
「仮にとは言え、俺は『トラフロ』最強の魔法剣士だからな！」
自嘲の笑いを浮かべながら、ソーマはかさにかかって攻め込んでいく。
彼の言葉に誇張はないが、事実とも言い難い。
各種武器を装備でき、各種魔法を行使できる魔法剣士というクラスは、非常に重宝され人気もあった。
ところが、魔法剣による攻撃では、物理攻撃や魔法攻撃を極めた

者には及ばなくなるのだ。そのため、上級者となった魔法剣士達は転職するのが一般的で、中級者最高位のソーマより強い『魔法剣士』は存在しなくなった。

「がはあっ！」
ソーマの突き出した切っ先を身に受けて、床に倒れ込んだカリアスがのたうち回る。
「やめてください！」
動けずにいたシシリーがようやく制止を訴えた。
「ソーマさんは事情が知りたいだけで、戦うことや殺すことが目的ではなかったはずです」
「そうは言っても、俺だけが悪いわけじゃないだろ」
「それでもです。ここにいるみなさんとも戦うと言うんですか？」
あらためて周囲を見渡すと、教会騎士と思われる人間がそれぞれ剣を抜き放ち、一定の距離で取り囲んでいる。
「このぐらいなら、なんとかなりそうだからな」
アイテムには回復薬もたっぷりあるし、十人程度なら包囲を斬り破るのも可能だとソーマは考えている。
「そんな……」
もう少し理性的な相手だと思い込んでいたシシリーは、物騒な答えを返されて青くなった。
しかし、シシリーの元へ意外な救いの手が差し伸べられた。

デウス・エクス・マキナと呼ばれる演出技法がある。
収拾のつかなくなった物語を超常的な存在が全て解決してしまうという結末を指し、あまり好意的な評価は受けない。
ここでも、下界の騒ぎを終わらせるべく、一体の神が訪れようとしていた。
雲間から陽光が降り注ぐように、中庭の一角へ空から差し込む青い光。

光を浴びているシシリーへ、皆の視線が向けられた。

第3話　勇者以外が知る勇者の目的

全身に青い光を纏わせた少女が、夢うつつの様子で言葉を紡ぎ出した。

「私はアクアリーネ。導かれし勇者ソーマよ。この地を救うのです」

その声は、驚愕で静まりかえった中庭で、皆の耳を通じて心へと染み込んでいった。

彼女を包む青い光は、心を波立たせる感情を鎮めるような、静かな威厳を感じさせる。

「……アクアリーネ？　水神の？」

皆が青い少女に見入っている中、信徒ではないソーマだけがつぶやきを漏らした。

駆け寄ったソーマが真っ正面に立っても、シシリーの視線は彼をすり抜けてその後方を見つめ続けている。

「勇者ってどういうことだ？　お前が俺をここへ連れてきたのか？」

初めて本当の意味で会話の成り立つ相手を見つけ、ソーマは内心に抱いていた疑惑をぶつけてしまう。

「これは……イベントだよな？　これは、ゲームなんだよな？　俺は目が覚めるんだよな！？　向こうへ帰れるんだろっ！？」

乱暴に肩を揺すると、ようやくシシリーの目がソーマを捉えた。

しかし、彼女を包む青い光は薄れていき、ついには消えてしまう。

パチパチと瞬きしたシシリーが目を見開いた。礼拝堂で出会った時と同じように。

「ソーマ……さん？　ケンカはやめてくれたんですか？」

「……アクアリーネと名乗ったことを覚えてないのか？」

「何を言っているんですか？」

これまた礼拝室と同様に、要点が噛み合わないまま二人は質問を

ぶつけ合う。
今回に限っては、状況を把握できていないのはシシリーの方だ。
まるで憑き物が落ちたかのようにシシリーは周囲を見渡し、自分へ向けられている驚愕の視線に戸惑っている。
しかし、ソーマはそれどころではない。

右腕を動かしてシステム画面を表示させる。
ログアウトのアイコン上へ移動させたソーマの指先が、小さく震えていた。
このアイコンを押してしまえば、状況は明らかになる。わずかな可能性も残さず、事態が確定してしまう。
ためらいを振り切ってアイコンを押した彼の指は、何の感触もないまますり抜けていた。何度試しても同じ結果だった。
ログアウトの機能は働かず、ソーマはこの『現実』に囚われたまま。

ドタドタと慌ただしい足音をたてながら、白地に青を配色したローブ姿の老人が駆けつける。
「何事です？　何が起きたのですか！？」
恰幅のいい体格で、普段は動じる様子を見せない老人が、一人の少女に目をとめた。
「しっ、司祭様！」
対応に困ったシシリーが慌ててぺこりと頭を下げる。
「アクアリーネ様がシシリーに宿り、この者をこの地へ召喚したのだと告げられました」
「ええっ！？」
アストレアが事情を説明すると、当の本人であるシシリーが素っ頓狂な声をあげた。
「そんなもの、その小娘の戯言に決まっている。信じられるものではない」

カリアスがすかさず反論したが、この件についてはアストレアも退こうとしない。
「アクアリーネ様ご自身のお言葉だぞ。それを確かめもせずに無視するなど、どれだけの不敬かわかっているだろう！」
「……」
さすがに強弁を諦めてカリアスが口を噤む。

「シシリー。少し話を聞かせてもらえますか」
二人が司祭の部屋へ姿を消すと、アストレアもソーマに話しかけた。
「お前にも話を聞いておきたい。そちらにも疑問があるなら私が答えよう」
言葉づかいは堅いままだが、どうやらこれは彼女の地らしい。先ほどまでと違い、口調からは怒りを感じなかった。
「……わかった」
困惑から抜けきっていないソーマがおとなしく頷いていた。

○

一つの机を挟んで、ソーマとアストレアが向き合って座る。もう一人、付き添いの教会騎士が同席し、壁際の椅子に腰を下ろしていた。
「お前をここへ招いたのはアクアリーネ様なのか？」
「……え？」
促されるままに行動していたソーマが、アストレアの声に反応して視線を彼女に向けた。
先ほど、シシリーが自我を取り戻した時のように、呆然としていたソーマの目に理性が戻った。

「アクアリーネ様に招かれたというのは本当なのか？」
一度頭を振って、ソーマが口を開く。
「……気がついたら礼拝堂に寝ていただけで、それ以外の情報はまったくない。さっきの声はシシリーのものだったし、アクアリーネの姿も石像でしか見たことはない。俺に頼み事をしたいわりには、説明する気もなさそうだな」
当然と言えば当然だが、ソーマはアクアリーネに対して畏敬の念をまるで持っていない。
さすがに、アストレアも眉をひそめたが、口に出しての非難まではしなかった。

「最初に会ったときの話に戻るが、どうやって礼拝堂まで入ったんだ？」
「俺が潜り込んだわけじゃない。転移門や転移石みたいに空間を越えて召喚したんだろ」
「転移門？」
「これも通じないのか……。とりあえず、この街の名前を教えてくれ」
「クローナの街だ」
「聞いたことないな。街なら全部知っているはずだけど」
「全部？　大陸中の全てか？」
「まあ、だいたいは。ここはどの大陸になるんだ？」
「シャングリラ大陸だ」
「シャングリラ大陸のクローナ……？　知らないな」
「ミッドライン湖周辺では一番大きい街だぞ。聞いたことぐらいあるだろう？」
「ミッドライン湖？　それなら、一番大きい街はアクアポリスのはずだろ？」
悩むまでもなくソーマが応じると、怪訝そうにアストレアが見返

した。

彼女に指示された教会騎士が、地図を持ってきて机の上に広げた。
直角三角形に近い形状のシャングリラ大陸が東西に伸びている。
北東側が直角にあたる部分で、そこには大陸で一番大きな湖があった。

「ここが、クローナになる」

彼女が指さしたのは、湖の南側の一点。
ソーマの記憶ではアクアポリスのあった場所だ。

「……本当か？」

「ああ。こんな事で嘘をついてなんになる。むしろ、そこに疑いを持つお前の常識を疑うぞ」

他にも幾つかの場所を確認してみるが、その結果はひどくチグハグだった。
基本的に、山、川、湖の名は同じであることが多く、街などは大きく異なっている。
国の名前や国境などは、ほとんど一致しない。

「ゲームの中じゃなさそうだな。よく似た別の世界ってことか……」

ソーマのつぶやきに、アストレアが首を捻る。

「なぜゲームの話になるんだ？　カードゲームやボードゲームに関係するのか？」

「あ～、説明が難しいな……」

ＶＲはもちろんのこと、ＭＭＯも、ＲＰＧも概念を伝えるのは難しすぎる。
端的に言ってしまえば『ごっこ遊び』になるだろうが、これはとても自分の口から説明する気になれなかった。

「ゲームは忘れてくれ。どうやら俺は、こことよく似た大陸で暮らしていたみたいだ」

「シャングリラ大陸とよく似た大陸が他にもあるのか？　地名まで

同じ大陸が？」
「いや、どう言えばいいのか……。例えば、誰かがいなくなって欲しいと思ったことがあるだろ？」
「ある」
即答だった。
「もしかしたら、ちょっと運命が違っただけで、そいつと一度も顔を合わせずに一生を過ごしたかも知れない。あるいは、そいつが怪我をして死んでいたかも知れない。そんな風に、なにかのきっかけから分岐して、違う結果の出た別の世界ってことだ。俺がいたのはそういう、別な街の存在する世界……なんだけど、難しいか？」
相手の表情をうかがったソーマが問いかける。
「……よくわからん」
ＳＦやファンタジーに馴染んでいなければ、パラレルワールドという概念は通じないのかも知れない。単に彼女の想像力が貧困という可能性もあるが……。
ソーマは理解させるのを断念した。

「それなら、さっき言ってたそっくりな大陸や、そっくりな街でいいや。そこには俺みたいな魔法剣士が他にもいて、俺より強い奴もいっぱいいた。俺はそういうところから来たんだ」
「お前よりも強い者がいるのか？」
「そりゃあ、いるさ。あんただって自分が世界最強だなんて思ってはいないだろ？」
「それはそうだが……、もっと強い者がそんなにいるのか……」
剣の腕にそれなりの自負があるようで、納得できないらしい。
「お前の名はソーマといったな？」
「ああ」
「私の名はアストレアだ。一応、名乗っておこう」
「そうか。よろしくな」

「ところで、その革袋はどういう仕組みになっているんだ？」
アストレアが指さしたのはソーマが腰につけているマジックポーチだ。
「俺も詳しくは知らないんだよな……」
ゲームの開始時点で必ず所有している物だから、ソーマが仕組みなど知るはずもない。
「俺が住んでいたところでは全員が持っているから、疑問に感じたこともなかった」
「魔法をかけた剣もそうなのか？」
「あれは剣の力じゃなくて、俺の特性というか……能力なんだ。どんな武器にでも魔法をかけられる」
「そっちの大陸では、武器に銀を使うのは一般的なのか？」
「うーん……、そこまで違うのか？　ミスリルという特殊な銀だけど、高くてもそれなりに流通してる素材だから、気にしたこと無いなぁ。誰かが見つけたり、作ったりすれば、ここでも出回るんじゃないか？」
ソーマは、ゲームプログラマーでもないし、マジックアイテムをつくる鍛冶師でもない。『システム的にそうなんだ』としか言いようがないのだ。

こうして、お互いに情報をやりとりし、魔法の系統や死亡条件なども『トラフロ』と変わらないことがソーマにもわかってきた。
それに、使用言語は日本語ベース。
他にも、教会騎士の間では身分の差がないはずなのに貴族風を吹かす人間もいるとか、通常は保管されているはずのフリーズソードを自己顕示欲から持ち歩く人間がいるとか、そんな話題も出た。
二人の会話を終わらせたのは、司祭からの呼び出しである。

○

司祭の部屋で待っていたのは、司祭とシシリーとカリアスの三人だ。
「シシリー様の身体にアクアリーネ様が宿ったことは間違いないようです。シシリー様を聖女と認めましょう」
厳粛な態度で司祭はそう口にした。
「聖女ってなんです？」
明らかな年上ということで、ソーマは丁寧に問いかけた。
「聖女とは神が降臨するための依代となった人物のことで、神の御心に触れた者として畏敬の対象となります」
神を宿すという現象は、教会にとって重大事なのだ。
司祭は現場に居合わせていないが、シシリーの魔力から降臨の痕跡を知ることができた。えせ宗教家とは違い、魔法的な実力が備わっていることも司祭となる条件の一つなのだ。

「それじゃあ、さっきの話はアクアリーネの意志ってことで間違いないんですか？」
「その通りです」
「それで勇者ってのは何をすればいいんですか？」
「アクアリーネ様がおっしゃった通り、この地を救ってもらえるとありがたいですな」
「簡単に言うけど……、救うってのは、具体的に何をどうすればいいんですか？　そもそも救いが必要な状況なんですか？」
「……神の御心は我々には計り知れないものですからな。何を望んでおられるか、じっくりと考えてみてはどうでしょうか？」
司祭にも心当たりはないらしく、慰めの言葉をかけられたソーマが悄然とうなだれた。
「ゲームの勇者なら魔王を倒せばそれで終わりだけど、魔王なんて

いないよな？　それに、俺の力で倒せるのか……？」
「魔王……というのは魔神に仕える王ということでしょうか……。そんな方が存在するんですか？」
浮かんだ疑問をそのまま口にするシシリー。
「ん？　こっちではそんな伝説が残ってないのか？　何百年も前に勇者が倒したって話。俺のいたところだと伝説の武器が世界各地に残されて……」
ソーマの説明が途切れる。
「あれ……、ちょっと待て。魔王が存在したという言い伝えも存在しないのか？　それとも、魔王がまだ生まれていないのか？」
単純にゲームと似ている世界と考えていたソーマは、一つの仮説に思い至る。

自分を取り巻く環境がゲームの設定と異なるのは、場所の問題ではなく、時間が原因だとしたら？
例えば、クローナの街が発展を遂げることで、将来的にアクアポリスの都となるのかもしれない。
そして、いずれ魔王も出現し、それを打倒する人間が必要となるのかもしれない。
「もしかして……、俺は本当に勇者なのか？」
「アクアリーネ様はそうおっしゃっていたのでしょう？」
何を今更と、司祭はにっこり笑って口にした。

第４話　勇者と騎士と貴族と泥棒の問題

一夜明け、ソーマは井戸までやってきた。
眠気を洗い落とすため、冷たい水で顔を濡らす。
彼には立派な客間が与えられたし、新品とまではいかずとも洗いざらしの綺麗な服を渡されている。布団やベッドも悪くはないし、そこにこだわるほど繊細な性格でもない。
それでも、昨夜の寝入りは遅くなってしまった。
一人っきりになったことで、否が応でも事態を直視するしかなったためだ。
仮想現実に閉じこめられるという設定の物語は以前からそれなりに存在する。ＶＲ技術が一般に普及してからは、より身近な題材となって、多くの作品が発表されている。
冒険やサスペンスにとどまらず、哲学的な話までジャンルは様々だ。
それらが原因なのか、『一時的にゲームから出られなくなった』と主張するプレイヤーが現れ訴えを起こしていたが、すべて敗訴している。
ゲームなどで使用されるＶＲ技術は、被ったヘッドギアから脳へ電磁波を送って五感を誤魔化す方式をとっており、装置や回線が停止すれば、多少の不快感はあっても簡単に目が覚めるのだ。
最近では、プレイヤー側の操作ミスやプログラム上のバグを争点に、拘束時間の補償をめぐる民事裁判が主流になりつつある。
しかし、ソーマの現状はこれらに当てはまらない。
なぜなら、彼は昨晩食事をしているのだ。『トラフロ』では味覚や嗅覚は扱っていないというのに。
ソーマは、何らかの事情でこの世界へ転移……、身も蓋もない言い方をするなら、『この地を救う』という仕事を押しつけるために、

アクアリーネによって拉致されたと考えていた。
ゲーム世界と似ている事情については、単純に元ネタという可能性もある。この異世界を夢などを通じて知ったゲームデザイナーが、『トラフロ』で再現したのではないか？
あるいは、パラレルワールドやら異世界というのは『あらゆる可能性』を内包しているのかも知れない。
人気ゲームもクソゲーも含め、ありとあらゆるゲームからアニメから、全ての物語が実在しているという可能性だ。人間が思いつく道具は全て実現可能という説もあるし、人の想像力など異世界の存在確率に比べてちっぽけなものなのかもしれない。
物理的にどうとか、科学的にどうとか、そんな前提条件は地球上だからこそ口にできる疑問であって、『この世界における法則』などソーマが知るはずもないのだ。
「まあ、俺が考えたところで、正解はわからないけどな……」
自分が本当に勇者だったとしても、しょせんは神様の操り人形という立場である。真相に辿り着くのは非常に困難だと思えた。
彼にできることと言えば、この世界では『そう』なのだと納得することだけだ。

昨日は、『トラフロ』における過去という仮説を思いついたが、これも確かめようがなかった。
ゲームでは新世紀３０３年と表現されていたが、これは魔王退治を起点とした年号のため、それ以前の年号をソーマは知らないのだ。
魔王や勇者の伝説を知らないのならば、未来という可能性は低そうだ。
そして、ここが過去だと仮定するなら、『トラフロ』時代に残っている国や滅んだ国に関する情報は、未来の知識ということになってしまう。特に滅んだ国にしてみれば、看過できない情報だろう。
何かの物語で、国の滅亡を告げた予言者が国王に殺されたというネタを彼も読んだ記憶があった。

現代社会でもデマや風評被害は大きいのだし、この世界でこの情報がどんなかたちで波及するか非常に判断が難しいところだ。
公表しない方が良さそうだというのが彼の結論である。

気がつけば、彼はあてがわれた客室の前まで戻って来ていた。
この街でソーマが頼るべき者は他になく、当分はこの部屋に住み教会の世話になることになりそうだった。
自室に戻ったソーマは奇妙な違和感を覚えた。
「……まあ、いいか」
朝食の時刻になれば呼びに来ると言われており、それまでは何もすることがない。
時間つぶしにアイテムでもいじろうかと、左腰に手を当て、続いて机を眺め、ようやく気づく。
「あれ？　どこいった？」
室内を見て回るが、マジックポーチが見あたらない。
昨夜、着替えるときに机の上に置いたはずだと、ようやく思い至った。

部屋を出て井戸までの経路を確認するが、やはり見つからない。
右手のジェスチャーでシステム画面を呼び出してみると、昨日と同じように所有アイテムのアイコンが一覧表示されていた。
「……どういうことだ？」
廊下に突っ立ったままソーマが首を捻る。
手元になくても、ポーチの持ち主には確認が可能なのだろうか？
それとも、どこか近くに落ちている証拠だろうか？
『トラフロ』においては、他のプレイヤーを直接殺すという行為は珍しい。蘇生が可能なため『殺す』という表現も的確ではないのだが、ここではおいておく。
殺害が少ない理由は単純で、所有アイテムを奪いにくいという点にあった。

通常、持ち主でなければポーチからアイテムを取り出せないと言われているが、この制限を正確に記述するなら、『知っている収容品しか取り出せない』ということになる。事前に教え合っておけば、行動不能になった持ち主に替わってアイテムを取り出すことも可能なのだ。

どこにでも裏をかく人間はいるもので、脅迫して所有アイテムの情報を聞き出したり、仲間が裏切るという事例もある。

それらの事情から、希少価値の高いアイテムは貸金庫に預けたり、信用できる仲間以外には秘密にするというのが一般的なのだ。

そして、ソーマが所有していた利用価値の高いあれこれは貸金庫に預けており、彼の手元にはないという状況にもつながっていた。

……今や、そのマジックポーチすら紛失しているという体たらくだ。

「もう、起きていたのか」

声をかけてきたのはアストレアだった。

「ああ……。それより、俺のポーチをどこかで見かけなかったか？」

「……なくなったのか？」

「部屋の机に置いてたつもりなんだけど、見あたらなくてさ。井戸までの道を確認してきたところだ」

「ちっ……。食堂に行くぞ」

踵を返したアストレアに、ソーマは動かずに反論する。

「いや、だからポーチを探してるんだって」

「朝食のために人が揃っているはずだ。まずは聞き込みをする」

「そうだな。知っている人がいるかもしれない」

「ずいぶんとのんきだな。あのポーチを取り戻さなくてもいいのか？」

「だから探してる途中なんだって……」

アストレアが呆れたように首を振った。

「盗まれたとは考えていないのか？」

「え？　いや……、だって、なんで？　『トラフロ』では……」
考えてみると、ゲーム中にマジックポーチを手放すということがありえなかった。
「ここは教会なんだろ？　盗みなんてする奴いるのか？」
「教会だろうと、盗みはあり得る。残念なことだとは思うがな……」
憂いを見せるアストレア。
「お前のところでは多く出回っている品でも、ここでは貴重な品だ。欲しがる者がいてもおかしくはない」
「別に盗まれたと決まったわけじゃないし……」
大事になりそうな気配を感じソーマが及び腰になるが、アストレアは重ねて告げる。
「もしも盗まれていたとすれば、動くのが遅れれば遅れるほど、戻ってくる可能性は低くなる。それを理解したうえで、後回しにするのか？」
「……いや、頼む。取り戻したい」
かさばらず、重さも無視できるあのポーチは、とても役に立つ。
もちろん、しまってあるアイテムも同様だ。
聖水教会に受け入れてもらえたのは幸運だったが、以降の事を考えるなら、使える手札は多ければ多いほどいい。

○

広い食堂には長テーブルが何列も平行に並んでおり、食事待ちの人間で八割方席が埋まっている。
「皆に話がある」
アストレアが唐突に声を張り上げると、皆のざわめきが減少していき、視線が彼女へ集中する。
「昨日の騒ぎで覚えている者もいると思うが、ソーマの革袋が無く

なった。どこかで見た人間はいないか？　何か知っている人間でもいい」
その問いかけに、一同は互いの顔を見つめ、ざわざわと疑問を口にする。
アストレアが言っていた通り、この教会内でも『紛失』事件の発生事例がある。残念ながら、品物が見つかることは稀だという。
監視カメラがあるわけでも無し、目撃情報が無ければお手上げだ。

いまさらながらに、焦りを感じたソーマがシステム画面を立ち上げる。
何かしらの情報があれば……、そう考えたからだが、なんの情報も表示されなかった。
「……えっ！？」
ソーマの上げた驚きの声に、アストレアが振り向く。
「どうした？」
「あ……、これなんだけど。……やっぱり見えないのか？」
「何がだ？」
重ねて問われ、ソーマはシステム画面が自分にしか見えないということを理解した。
「……真面目に探すつもりはないのか？」
呆れたようなアストレアに、ソーマは慌てて弁解する。
「革袋の中身を確認しようとしたら、まったくわからなくなったんだ。さっきまでは反応があったのに」
システム画面上では、アイテムが何一つ表示されなかった。
収容物を全て取り出していれば、空になることもある。
しかし、全て出したまま持ち運ぶのは効率が悪すぎるし、ソーマの所有アイテムを全て知っている人間などいるはずもない。
「考えられるのは……、距離……か？」
「おい。なんの話をしている？」
「廊下からここへ来るまでの間に、遠くへ持ち出された可能性があ

る」
「それがわかるのか？」
「……たぶん」

「改めて尋ねる。今、この場にいない人間は誰だ！？　ソーマの部屋の近くでその者を見かけたことはないか？」
再び食堂内を見渡したアストレアが、一人の少年に視線を止めた。
おどおどと身を縮ませている少年は、様子を窺うようにある教会騎士へ目を向けていた。
「マルコ。何か知っているのか？」
名前を呼ばれた僧侶見習いの少年が、驚きのあまりビクリと身体を震わせる。
マルコはアストレアと視線が合うと、怯えるように俯いてしまう。
「どうした。何かやましいことでもあるのか？」
「ち……違います」
問われたマルコは必死に首を振る。

「知っていることを話せ」
しかし、マルコは何度も口を開きかけては、その度に口を閉じてしまう。
チラチラと動くマルコの視線を追って、アストレアはその人物へ声をかけた。
「お前が盗んだのか？」
「ふざけたことを。私が平民の持ち物になど手を出すものか」
疑惑の対象、カリアスは動じることなく否定した。
「だったら、なぜ、マルコが貴様を見ている」
指摘されたカリアスが、不機嫌そうにマルコを睨みつける。
「おい。この子を脅すのはよせ！」
「黙っていろ、平民が！　おい、小僧。知っていることがあるなら、さっさと言え！」

「……ひっ」
怯えるマルコに、カリアスは重ねて追及する。
「聞かせてもらおうじゃないか。誰が犯人だと言うんだ？　言わないなら、貴様を共犯として牢屋へぶちこむことになるぞ」
「さ、さっき、アントンが教会から出て行くところを見かけたんです。革袋を持っているようには思えなかったけど……」
革袋そのものは、どれほど物が入っていてもかさばる物ではない。隠すことは容易だろう。
疑惑はあるという程度のはずだが、アストレアは激しく反応を示した。
「なんだとっ！？　……貴様っ！」
なぜか、カリアスを睨みつける。
「ふん。私ではないと言っただろう？」
嘲笑で応じるカリアス。
「信用できないなら、クラウスの屋敷にでも行ってみたらどうだ？」

「教会を出たばかりなら、今すぐ追えば間に合うかもしれん！」
そう告げて、アストレアがソーマの腕を引っ張った。
困惑しながらも、彼女に従って駆け出すソーマ。
「話の流れがよくわからなかった。犯人はアントンじゃないのか？
カリアスに関係しているのか？　クラウスって誰？」
「アントンは伯爵家――カリアスの実家の紹介でここへやってきた。クラウスとは奴の兄の名だ」
それが彼女の答えだった。

第5話　貴族のあるべき姿に対する反面教師

道路には石畳が敷かれ、周囲には中世ヨーロッパを思わせる石造りの街並み。
ソーマにとっては初めて見る光景のはずだが、『トラフロ』経験者としてはあまり違和感を感じなかった。
クローナの街に関する知識の無いソーマは、ただただアストレアに並んで走っている。
「ポーチの反応というのは、いつでもどこでも確認可能なのか？」
「たぶん」
「ならば、走りながら確かめてくれ」
「……わかった」
走行中では視界が制限されるため、好んでやりたいとは思わないが、走っている理由を考えれば拒否できるものではない。
ソーマがシステム画面を表示すると、足下を隠すように視界の斜め下へ半透明の画面が現れる。
「どうだ？」
「今のところ、反応はないな」
「そうか……。向こうも走っているのか……、それとも、道が違うのか……」
アストレア自身も確信できていはいないようで、迷いが見られた。
「盗んだのがカリアスだったら、クラウスの情報も嘘って事になるのか？　二人で仕組んで、俺達を陥れるようとした罠とか？」
「そこが判断の難しいところなんだ。カリアスとクラウスはもともと仲が悪いと聞いている。それを考えると、クラウスの鼻を明かそうとして、真相を教えた可能性もあるし、逆に、カリアス自身が犯人で、私達をクラウスと噛み合わせようと企んだのかもしれない」
アストレアも短絡的に犯人と決めつけるわけではなく、この一件

については拙速を重んじる理由があった。
「カリアス達の父親はこの街の領主であるホンワード伯爵だ。あのポーチをを屋敷内にまで持ち込まれてしまうと、もう手出しができなくなる。できれば、屋敷に入る前に押さえたい」
「俺はポーチを手放した経験がないから、どの程度有効か俺も知らないんだ。誰が持っているかまでは、特定できないと思う」
「それでも……、近くにあるとわかれば目星はつけられる。屋敷の中のどこかでは特定も難しいが、街中であればクラウスの関係者を疑えばいい」
「そういうことなら、可能かもな」

これまでにも、ソーマは『トラフロ』との違いをいくつか実感した。
バーチャルリアリティとはあくまでも仮想であって、現実そのものではない。もっとも、全てを再現するのであれば、バーチャルで行う理由事態が薄れてしまう。
そのため、ゲームにはゲームらしい省略化が行われていた。
教会には多くの人間も暮らしていたが、ゲームでまであれだけの人数が存在していたら、イベントに関わる人を捜し出すだけでも難しい。
それは街並みも同様で、数万単位で人が生活するような街を再現すると、町を出るだけで一苦労だ。
特別な役割を持たない人や物は、ゲーム上ではすべて省略対象というわけだ。
いつかの街区を駆けながら、ソーマはそんな事に思い至って少しばかり凹みそうになる。
『本当のソーマ』は省略される側に分類されるとの自覚があったからだ。

○

大通りの角を左へ曲がった突き当たりに、大きなお屋敷があった。接近してしまうと、周囲に張り巡らした刑務所のような大きな壁が目隠しとなって、館の外観はほとんど見えなくなる。

「ここだ」

「え？　……あれは違うのか？」

ソーマの指さした先には、街並みの上から頭を突き出した城が建っていた。

さっきの大通りもあの城へ向かっており、この街では一番高く一番大きな建造物のため、誰もが領主の城だと考えるだろう。

「確かにあれが伯爵の居城だ。しかし、クラウスは自分用にこの館を建てて暮らしている。わがままな人間だと聞いているし、親が一緒では息が詰まるんだろう」

その感情だけはわからなくもない。なにしろ相手は、父親で、伯爵で、領主なのだ。

「だけど、ここでも反応がないぞ」

システム画面に視線を落としても、空として表示されたままだ。

「この敷地内のどこかにあればわかるのか？」

「さっきも行ったとおり、補足できる範囲もわからない」

「アントンが別な道を歩いていたとしても、こっちから来ると思うんだが……」

単純に表現すると、屋敷を基準に見た場合、教会は東の方向に位置している。

屋敷の北門前に立っていた二人は、門番の視線を受けながら、塀に沿って東側へ向かって歩き出す。

「……教会よりも大きいんじゃないか？」

「そうだな。自己顕示欲が強いんだろう。カリアスを見てもよくわ

かる」
　昨日の一件からでもわかるが、アストレアはカリアスをよっぽど嫌っているようだ。
「アントンというのはどういう子なんだ？」
「普通の子だな。孤児のため十歳としては少し発育が悪く、痩せていて背も低いが、それも同年齢の子と比較してわかる程度だ。なぜか、伯爵家の紹介で受け入れることになったが、カリアスとの接触はなかったな。教会では元の身分には触れないというのが建前だが、カリアスは元貴族しか身近に置かない。アントンは他の見習いと一緒に行動することが多かった」
　東門に到着したところで、アストレアがあらためて問いかけた。
「……どうだ？」
「だめだな」
「お前はここで確認してくれ。私はこの道を通って一度教会まで戻ってみる」
「ん？　だったら俺も一緒に行くけど？」
「一緒に行動して見逃したらまずい。お前は革袋が屋敷に持ち込まれないように、ここで見張っておけ」
「わかった」
　頷いた彼をその場に残して、アストレアは東へ延びる道へ姿を消した。

「ポーチかぁ……。そうだよなぁ」
　ソーマのマジックポーチには、レア物と呼ばれるアイテムはほとんど入っていない。
　日常生活で不要不急な大金を持ち運ばないのと同じく、ソーマの所有品はフィールドやダンジョンでの戦闘に備えた品揃えが中心だった。
　瞬時に帰還できるような転移石など、有用なマジックアイテムも含まれていたが、前述の通り、これらは第三者が取り出すことは無

理なはずだった。
ソーマは失ったという意識が強いため、自分にとっての価値しか考慮していなかった。
いま、問題とすべきはマジックポーチそのものの有用性だ。
ゲームとしてはごく基本的なアイテムで、珍しくも何ともない。
むしろ、存在しなかったらプレイヤーから苦情が出るレベルだろう。
「……あれなら長い物や重い物も簡単に運べるし、盗みなんかにも向いてるもんな……」
極端な例を上げるなら、凶器を隠して持ち込べば暗殺手段としても活用できる。
そんな事態になったら、さすがに受け止め切れる自信はなかった。
「あー……、まずいよな……」
今更ながら、嘆きが漏れた。

『トラフロ』においては、街中における戦闘行為には衛兵が駆けつけ、その場で罰金を取られる。払わなかったら、牢屋に入れられて数日間の禁固刑だ。
詐欺やらセクハラやらは、メーカーへ通報して対処してもらうことになる。
だが、『現実』においては、『トラフロ』と同じ流れにはならないだろう。
「なんと言っても、容疑者が体制派だもんな……」
そもそも実行犯らしきアントンも行方不明で、カリアスとクラウスのどちらが関わっているかも不明。そのうえで、伯爵家が隠蔽に動かれてしまうと処置無しだ。
そして、残念なことに、マジックポーチにはそれだけの価値がありそうだった。
「おい、そこのっ！　なんだ貴様は！」
不意に声をかけられて、思わずビクリと反応してしまうソーマ。
「俺のことか？」

「お前以外に誰がいる！　この屋敷に用でもあるのか？　ないなら、離れていろ！　目障りだ！」
「……わかった」
腹立たしくはあったが、クラウスが犯人と確定していない状況でもめるのは得策ではない。
ソーマはすごすごと東門から離れることにした。
「塀にも近づくな！」
「はい、はい……」
不承不承、塀から東側に一本ずれた道までソーマは移動する。
ポーチの検出範囲は不明ながら、東側にずらしただけなら問題にはならないはずだ。

○

そして、ソーマは二人の男が走っていくのを目にした。
「貴族と聖水騎士がケンカしてるらしいぞ」
「なんだってまた……」
漏れ聞こえた会話に、ソーマはピンと来た。
彼のおかれた状況で、『貴族』や『聖水騎士』というキーワードに反応しないはずがない。
ただの思い過ごしだったとしても、たいした問題にはならないだろう。
二人の後を追いかけたソーマは、開いているシステム画面に再びアイテム一覧が表示されたことに気づく。
どうやら、当たりらしかった。
前方へ視線を向けると、大道芸を見物するように人の輪ができていた。
聴衆から生じるざわめきを越えて、良く通る声が響いてくる。

「なんの根拠もなく私を泥棒扱いするというのか？　聖水教会では礼儀をというものを、教えていないようだな」
その口調も、その声質も、カリアスとよく似ている。
クラウス当人を目にしたソーマの第一印象は、『カリアスに似た男』であった。

「私はその子と、その子が持っていた革袋に用があると言っただけだ」
正面に立つアストレアが不機嫌そうに応じている。
「だから、これは私の物だと言っている。そうだろう？」
革袋を掲げたクラウスが、引き連れていた従者に問いかける。
「もちろんです」
「……まあ、そうっすね」
ローブ姿の男がすかさず応じ、無骨な男は憮然とした態度で頷いた。
「……」
彼等側に立っている子供は、口を噤んで言葉を発しようとしない。
「私の物を拾ってくれたから、お礼をするために屋敷に呼ぶというのだ。邪魔しないでもらおうか。聖水教会などより、いい物を食べさせてやると言っているんだ」
どうも、クラウスは秘密裏に事を進める気さえないらしく、そんな虚言を強引に押し通すつもりらしい。
「それとも、招かれた子供が妬ましいか？　頭を下げて頼めば、同席を許してやってもかまわんぞ」
「貴様っ……」
侮辱を受け、アストレアがギリっと奥歯を噛みしめる。

「そいつがクラウスなのか？」
突然上がった第三者の声。
相手を察したアストレアが答えを返す。

「そうだ。カリアスよりも……デキの悪い兄だ」
「……そりゃ、酷い」
自然に漏らしてしてしまった言葉が、クラウスにとっては逆鱗だったようだ。
「私があんな奴よりも劣るだと！　貴族の責任を放り出して、教会に逃げ出すような男よりもっ！？」
クラウスの怒りなどどうでもいいことなので、アストレアはそれを無視してソーマに問いかけた。
「あの革袋で間違いないか？」
「反応があった。確かに俺のだと思う」
「貴様……、私の言った言葉を聞いていなかったのか？　これは私のものだ。つまらん、言いがかりはよせ！」
自分の主張を受け入れようとしない相手に、クラウスは不機嫌さを募らせた。
「さては、貴様等自身が泥棒だな？　分不相応に、貴族の持ち物を奪い取るつもりかっ！」
あくまでも自分が正しいと強弁するクラウス。
このままでは、いつまで経っても平行線となりそうだ。

「剣を貸してくれ」
ソーマの要望に、アストレアが息をのんだ。
「……戦う気なのか？」
「言い合いをしていてもきりがないだろ。それに、あれをあいつに渡すのもマズそうだ」
さっきの後悔を思い返す。
誰も持たない力を手にしてしまうと、クラウスみたいな人間は悪用することにためらいなど持たないだろう。
その結果、クラウスが好き勝手に暮らし、ソーマが後悔し続けるというのは、さすがに納得がいかない。
「アストレアだと教会が絡むけど、俺個人の問題ならどうにでもな

るだろ？　元々の原因は俺にもあるしな……」
本音を言うなら、領主の家ともめるのも嫌なのだが、素直に渡してくれる可能性はゼロのようだ。
「私に刃向かうというのか？　……ふん。丁度いい。後で騒がれても面倒だからな。思い知らせてやる」
相手をいたぶれると考えたのか、舌なめずりするようにクラウスが嘲笑する。
「貴様は知らんだろうが、この二人は光の加護を持つ者達だ。ザジはサンダートマホークを使う傭兵で、魔術師のジョルジュは中級（メガ）・電光（サンダー）魔法を使う。聖水教会の者が勝てるはずなかろう！」
手斧を腰にぶら下げている男が、こちらの様子を窺いながら肩をすくめた。
痩身にローブを羽織った男は、自慢げに口元を歪める。
カリアスへの過剰な対抗意識が高じて、クラウスは聖水教会までも毛嫌いしているようだ。その反発意識から、光属性の人間ばかり集めたのだろう。
ソーマに関する情報源はアントンらしいが、彼等は重要な点を勘違いしていることに気づいていなかった。
――聖水教会にいるから水系統？　結果的に間違ってはいない。
「その二人に、光の魔法剣で勝てるのか？」
剣を差し出しながら、心配そうに尋ねるアストレア。
「まあ……、それでも勝てるとは思ってる」
苦笑を浮かべてソーマが応じた。
それでも負けない。
しかし、自ら進んで苦労する必要もないのだ。
――光の魔法剣を使ったから光系統？　それもまた正しい。

アストレアが所持していた剣は、昨日と同じく普通の長剣だ。
ソーマはクラウスに切っ先を向けたまま、魔法を発動させる。
「中級（メガ）・火炎（ファイア）魔法」
預かったアストレアの剣に、紅蓮の炎が燃え上がった。
――そして、火系統の魔法までも使える。それが魔法剣士なのだ。

第6話　魔法剣士の魔法剣士たる由縁

「そ、そんな！？　クラウス様、火系統だなんて聞いてないですよっ！　それも中級だって！？」
狼狽したジョルジュが思わず詰問してしまう。
「私が知るかっ！　どういう事なんだ、これは！？」
クラウスは背後を振り返り、自分の陰に隠れているアントンへ怒りをぶつけた。
何らかの事情でサンダーソードを手にした、聖水教会に属する者。そんな思い込みが的外れだったという、それだけの事実を彼は受け入れずにいる。
「しっ、知らない。だって、昨日は電光魔法しか使っていないから！」
「バカなことをっ！？　別系統の魔法など使えるはずがない！」
「でも、本当なんだよ！」
「……ちゃんと人の話は聞いてやれよ」
アントンを弁護する義理などなかったが、相手の言葉を否定するだけのクラウスに、ソーマは思わず口を挟んでいた。
「俺は火炎魔法も電光魔法も使える。まだ誰にも見せてないけど、氷結魔法もな」
「あり得ん！　そんな人間がいるなど聞いたこともないぞ！」
「……ついでに言っておくと、こうやって剣に魔法をかけることもできる」
「そんなことが人の身でできるはずがないっ！　教会に頼らず、武器に属性を付与するなど人間には不可能だ！　そのようなでまかせを口にして、私を煙に巻くつもりか！」
せっかく有益な情報を聞かせてやっても、クラウスは聞き入れようとしない。

「煙に巻く？　勘違いしてるんじゃないか？　俺はお前を叩きのめすっ……てっ！？」
意識がクラウスへ向いていたソーマへ、手斧を引き抜いたザジが瞬時に間を詰める。
「……くっ！」
身を包むオーラが刃を阻み、体に傷はない。しかし、オーラを削られた痛みから逃れることはできなかった。
反撃を望むソーマの剣がザジを襲う。
あるいはかわし、あるいは受ける。
本来ならば、武器の打ち合いだけで物理ダメージは発生しないが、ザジは痛みから顔をしかめていた。
「ファイアソードなのは確からしいな。それも、中級……か」
属性武器同士の戦いでは相性による影響が大きく、手斧の電撃はソーマに届かず、剣の炎熱がザジを焼く。
鍔迫り合いともなれば、圧倒的に有利なのはソーマの方だ。
後方へ退いたザジが、左側へと回り込もうとする。
「こいつの言っていることが真実かどうか……、そいつはどうでもいいんだ。問題はファイアソードを持っているという事実の方でね。まあ、相手が一人なら、なんとかなるだろうさ。うまく剣をかわせれば……」
ソーマに向けていたザジの視線が、軽く左右に揺れる。

「……後ろだっ！」
あがった声はアストレアのものだ。
ザジのアイコンタクトを受けたジョルジュが魔法を発動させる。
「中級（メガ）・放電網（スパークネット）」
後背を振り向いたソーマは、薄く広がった電撃を目にする。
起動が始まったばかりで発動には至っていない。瞬時にそう判断したソーマは、ザジを無視して火炎剣を後方へ向ける。
バチバチと空気を震わせて放電が始まり、無軌道な電撃が無数に

迸った。
正面から伸びてくる電撃は火炎剣が打ち消してくれたが、回り込んでくる電撃がソーマにまで達する。
それでも、中級・電光魔法の直撃よりもはるかに傷は浅い。この魔法は、威力よりも命中率をあげることを目的に調整したのだろう。
しかし、隙を見せたソーマの背中へザジが斬りつけていた。
袈裟がけの太刀筋に走った痛みをこらえて、振り向きざまに振るった火炎剣が、ザジをしたたかに斬りつける。
「ちっ、さっきの一撃と手応えが変わらねぇな」
ザジの左手には、青く光るナイフが握られていた。
「……まさか、フリーズナイフ？　そんなものまで」
アストレアが驚きの声を漏らす。
本来、属性武器は値が張るため、教会の外で見かけることは珍しい。それが、別属性で二つともなればなおさらだ。
「あんたが火属性なら、こいつで仕留めるつもりだったんだよ」
「そっちも、火属性が平気みたいだな」
魔法を行使するには神との契約が必要で、その場合は恩恵と共に弱点も背負うことになる。
ザジ本人は属性武器の所有者にすぎず、ソーマは魔法剣士の特性として無属性であった。
どちらも負属性を持たないことから、ソーマへのフリーズナイフも、ザジへの火炎剣もともに決定打とはならない。
「それなら……、電光魔法（サンダー）」
ザジに向けて電撃を放つ。火炎魔法ではナイフ、氷結魔法では手斧で受けられると考え、ソーマは通用しやすい手段を選んだのだ。
魔法は、名を唱えてから発動までにタイムラグが発生する。
馴れた者ならば回避も可能で、ザジは横っ飛びすることで電撃をかわしていた。
そのため、すぐさま身を翻したソーマを追うのに、一歩遅れてし

まった。
ジョルジュは自分に向かってくるソーマへ向けて慌てて魔法を放つ。
「めっ、中級（メガ）・電光（サンダー）魔法」
起動を知りながら、ソーマは足を止めずに魔法へ飛び込んだ。
電撃を身に浴びつつ、火炎剣で斬り破ったソーマがジョルジュの前に到達する。
「……ひっ」
ジョルジュが身に纏うオーラは、火炎剣に浸食されてその切っ先は胴体にまで届く。
さらに、二撃、三撃と撃ち込むソーマを、ザジが止めに入った。
火炎剣がザジに向けられたことで、ジョルジュが慌ててソーマの間合いから逃げ出そうとする。
しかし、彼はソーマの間合いを把握して損ねていた。
「火炎（ファイア）魔法」
ソーマの右手が火炎放射器のように炎を噴き出し、ジョルジュの背中を焼いた。
体力が大幅に減少すると、身を守るオーラの薄れた瀕死状態となり、体に受けた傷はその場で回復しなくなる。対処法は二つで、傷を覚悟して反撃や離脱の行動を起こすか、動かずに力を温存して防御力の上昇に務めるか、だ。
ジョルジュの例で言えば、気絶したらしいので問答無用で後者であった。

「面倒なことになっちまったな……」
嘆きながらも、ザジに諦める様子は見られなかった。
ザジは、これまで右手の手斧を突き出した構えを取っていたが、現在は火炎剣へ対処するため左手のナイフをソーマに向けている。どんな属性持ちが相手でも戦える様に、二つの武器を使い分けるのがザジの戦い方なのだろう。

これは『トラフロ』においても有効な、定番の戦い方と言える。
しかし、ザジがどれほど一系統を相手に実戦経験を積んでいようと、ソーマがこれまで相手にしてきたのは二系統だ。なにしろ、『トラフロ』においては魔術師の契約も二系統が標準なのである。
「魔法剣士の厄介さは、まだまだこんなもんじゃないぞ」
魔法剣士という職には、魔法剣の技能が必須となる。
つまり、魔法を使えるだけでは成り立たない。
術士系が魔法を行使するように、戦士系にも体力消費を代償とした体術が存在する。
「全開（フル）・四方連撃（スクエア）」
これは、そのうちの一つ。
体力を瞬間的に燃焼させたソーマが、瞬時にザジの間合いへ踏み込み、続けざまに上下左右からの四連撃を繰り出した。
そのうち、初撃だけはフリーズナイフが受け止めたものの、二撃目三撃目は反応もできずに体へ叩き込まれ、最後の攻撃はかろうじてサンダートマホークが阻んでいた。
地面に倒れたザジは、横転することでなんとかソーマから距離を取る。
左肩と右脇腹から、負傷を示す血の霧が立ち上っていた。

「こいつは、お手上げだな……。俺の負けだ」
肩をすくめたザジが、ナイフと手斧をしまうとくるりと踵を返す。
「こんな戦いで傷を負うのもバカバカしいからな……」
「……え？　おい」
こちらが呆気にとられているうちに、ザジは人混みを割って一目散に逃げ出していた。
「なっ！？」
呆気にとられたのはソーマだけではなかった。
取り残されたクラウスも同じ思いだったらしい。
「バカなっ！　貴様には大金を払っただろう！　戻ってこい！」

果たしてその声が届く距離にいるかどうか……。
それなりに実力を認めたつもりのソーマも、躊躇無く逃走を選んだザジに驚いていた。
「……だからこそ、強いのかもな」
無茶な戦いに固執せず、退くべき時に退く。それが、もっとも賢い戦い方なのかも知れない。
瀕死状態で負った傷は、薬草などによる治療が必要で、この傷痕は後々まで残ってしまう。傷を弱さの表れと見る者もおり、ザジが逃走を選んだのもそれが一因となっていた。
「まあ、あっちは放っておいてもいいか……」
ソーマの目的は、ザジとの勝負ではない。それをちゃんと理解しているからこそ、ザジは逃走を選んだとも言える。
向き直ったソーマの視線を受けて、クラウスは慌てて周囲を見渡した。
ジョルジュは倒れ、ザジは逃走し、アントンもまた姿を消していた。
従犯はこのさい放置だ。
ソーマにとっては、主犯たるクラウスが一番の問題なのだ。

第7話　勇者の誓い

「おいっ、誰か！　屋敷の門番を呼んでこい！　それに衛兵も呼びに行け！　この男は泥棒だぞ！」

誰かの助けを求めて、クラウスが叫ぶ。

伯爵家を恐れて動いた数名は例外としても、多くの人間が第三者に徹して見物を続けている。

「何をしているっ！　この男を止めろ！　貴様等も泥棒の一味かっ！？」

身分制度があったとしても、その階級が通じない時や場所は存在するものだ。

残念ながら身分もあり知名度が高い分だけ、彼の行状は平民達の間でも、あるいは、平民故に広まっていた。

クラウスの評判が芳しくなかったとしても、彼に理があると考えた者が多ければ、もう少し状況は味方してくれたかもしれない。

クラウスが革袋の中から、到底入りそうもないサイズの長剣を抜き出したのを見て、幾人かが驚きの声を漏らす。

昨日、ソーマが使用したミスリルソードで、おそらくアントンが彼の目の前で実演して見せたのだろう。それ以外に、クラウスが取り出せる理由はない。

「さ、電光魔法（サンダー）！　電光魔法（サンダー）！　……電光魔法（サンダー）っ！」

実質的な対抗手段を持たないためか、魔法が発動するはずという希望にクラウスがすがりつく。

「さっきも言ったけど、剣が魔法を生み出すわけじゃなくて、持ち主である俺が剣に魔法をかけてるだけだ。それに、光属性の武器一つで俺に勝てないのは見てただろ？」

真情を表すようなソーマの呆れ顔に、クラウスの顔が屈辱で赤く染まる。

本来、パーティーを組むという行為は、互いの欠点を補うために

行われる。一系統のみにこだわると、特定の属性相手に有利というだけで、優位属性に対しては脆さを露呈してしまう。
この当たり前の配慮がクラウスに欠けているのは、身分に守られていることを盲信し、自分が守勢に回ることを想定していないからだろう。

「貴族貴族って、いつも持ち上げられてて、いい気になってるんじゃないか？　お前のことをなんにも知らないけど、そんな気がする」
「ふ、ふざけたことをっ！　私は次期伯爵だぞ！　聖水教会の者ごときがなれなれしく話していい相手ではないんだ！」
「……言いたいことはわかった。だけど、俺もお前を見習って、自分の都合で好きに動くことにする。お互い様だ」
「私へ攻撃するつもりなのか？　貴族だぞ！？　領主の息子にそんな対応をして許されると思っているのか！？　聖水教会だって無事ではすまんぞ！」
「正直、聖水教会に手出しされるのは困るけど、だからって、泥棒を見逃すのは理屈に合わない。思い上がりを正すためにも、たまには痛い目にあっておいた方が、お前の将来のためにはいいんじゃないか？」
『トラフロ』ではオーラが体を保護するため、傷が残ることはほとんどない。昨日と今日の戦いを通じて、この地でも同様の法則が働いていることを彼は理解していた。
ただし、オーラの減少には痛みが伴うため、おしおきとしては有効だろう。
「親父にも殴られたこと無さそうだけど、……まあ、諦めるんだな」
これ見よがしに火炎剣を振り上げたソーマを前に、クラウスはパクパクと口を開閉させたまま、言葉を発することも逃げ出すこともでない。
クラウスの左肩から右脇腹へ、袈裟がけに剣が振り下ろされた。
服が裂けて血しぶきが舞う。

「ぎゃあああぁぁぁぁぁっ！」
絶叫をあげてクラウスが仰向けに倒れた。
そして、そのまま動かなくなる。

「……あれ？」
歩み寄ったソーマが顔を覗き込むと、クラウスは目を剥いて苦痛に叫ぶ表情のまま固まっていた。
その一撃だけで、クラウスはあっさりと死んでしまったのだ。
「いや、だって、その……、あれ？」
唐突な状況変化に、ソーマがうろたえ始めた。
彼に人を殺した経験などあるはずもなく、自分の行為と現れた結果が頭の中でうまくつながらずにいる。
「カリアスとは違って、クラウスは戦いの経験もないはずだからな。ひょっとしたら、カリアスへの対抗心から、雷神の洗礼を受けていたのかも知れない」
アストレアの声が冷静に分析する。
「それに、まだ完全死には至っていないと思うが？」
「あっ……！？」
『トラフロ』のゲームでは蘇生が存在する。
交戦状態になると体力や魔力が失われ、どちらかが尽きた時点で仮死状態になるのだ。強大な一撃を食らったり、分不相応な魔法を使用すると、瀕死を飛び越えて仮死状態に陥ることもある。
体力か魔力のどちらかが残っていれば、これを消費しながら仮死状態は続き、どちらも空になったところで完全死となる。この完全死まで達していなければ蘇生も可能だ。
クラウスは負傷によって体力は尽きたものの、魔法は使用していないため魔力は残っているはずだ。
昨日のアストレアとの会話でも、ソーマはこの件を聞き出していたのだが、始めての状況にすっかり動転してしまっていた。

「教会で蘇生してもらえるかな？」
「……今回はアントンが絡んでいるようだし、司祭様も応じてくださるだろう」
安堵したソーマは、仮死体となったクラウスの手から、ミスリルソードを取り上げて、マジックポーチの中にしまい込んだ。
その革袋を、落とさないように腰へしっかりと結びつける。
「とりあえず、こいつらを教会まで運ぶとするか……聖光回復（レストア）」
ソーマが回復魔法をかけると、瀕死状態にあったジョルジュの体がぼんやりと黄色に輝いた。
教会で洗礼を受けると、最初に使えるようになるのが回復魔法だ。これには、属性の優劣は存在せず、合致した属性魔法ならば回復効果は高くなる。
数分をかけて徐々に回復していくため、強敵との戦闘中では使いづらいものの、戦闘後であればなんの障害にもならない。
「おいっ、起きろ」
うつぶせに倒れたジョルジュの肩を軽く揺する。
小さく唸ったジョルジュが、意識を取り戻すなり跳ね起きた。
すぐ近くにソーマの顔を確認して、怯えた表情で身を退こうとするが、ソーマに腕を捕まれていてはそれも不可能だった。
「クラウスはそこで死んでるけど、続きをやるか？　傭兵と子供はもう逃げ出してる」
一応は自由意志を確認してみた。
「俺としては、おとなしく教会まで来て、素直に白状してもらえると楽なんだけど」
「わ、わかった。白状する。クラウス様が子供に命じて、その革袋を盗ませた。俺は護衛として雇われていただけで、その件には関わっていない」
あっさりと口を割った。
クラウスという後ろ盾がいない状況で、聖水教会と事を構えるのはさすがに避けたいようだ。

「聞いての通りだ！」
周囲の野次馬に向かってアストレアが宣言する。
「この者達は聖水教会で預かる。伯爵家には教会から使いを出すから、知らせに向かう者がいるのなら、その件も伝えて欲しい」
「こいつ運べる？」
「え……、私は魔術師なので……そんな力は……」
ソーマの無茶ブリを受けて、ジョルジュはなんとか拒もうとする。
「……仕方ないか」
できれば避けたかったが、ソーマはクラウスの亡骸を担ぎ上げた。
人を肩に担ぐのは初めての経験だったが、ゲームのステータスによる影響か、肩にかかる重量はたいして気にならなかった。

○

ソーマ達が教会へ戻ると、当然のごとく一騒ぎあった。
貴族の死体を持ち込んだのだから、当然の帰結と言えるだろう。
予想外の反応を示したのはカリアスだった。
「くっ、くくくくく。はははははははっ」
肩を揺すっていたと思ったら、カリアスが大笑いし始めた。
「こんなに笑ったのは久しぶりだぞ。貴様は平民だが、間違いなく勇者だ。私が認めてやろう」
兄の死体の前で爆笑しているカリアスに、少しばかりソーマは退き気味だったが、まああの兄では仕方がないと思い直す。
「それでコイツを蘇生させてもらおうと思ってるんだ」
カリアスが笑いを納めて真剣な顔で問いかけた。
「何故だ？」
「何故って……、貴族を殺すのは問題にならないのか？　俺もそう

だし、教会だってそうだろうし、……伯爵家としては死んだままでも平気なのか？」
「それは、父上次第だな」
「父上？」
「この兄に蘇生させるだけの価値があると認めれば、儀式用の寄進をするかもしれん。私なら、こんな奴には銅貨一枚払う価値はないと思っているがな」
随分と辛辣な意見だった。
「兄は光系統の傭兵を雇っていたはずだが、お前が倒したのか？」
「ああ」
「同系統を相手に一人でか？　あの女では役には立たなかったはずだ」
「火炎魔法を使ったからな」
その返答にカリアスがぎょっとなった。
「火炎魔法まで使えるのか？　もしかして、氷結魔法も？」
「全部使える」
「……」
二の句も告げないという様子のカリアス。
この辺りを理解して、自分へ突っかかることを自粛してもらえれば、ソーマとしては非常にありがたい。

司祭のコルウィンは、さすがに動じることなく、こう言ってのけた。
「これもまた、アクアリーネ様の御心なのでしょう」
それで押し通すのも問題がありそうに思えたが、教会の見習い僧侶が発端と言うこともあって、彼は蘇生まで請け負ってくれた。
おかげで、ソーマは殺人犯とならずに済む。
ごくごく個人的な感覚だが、彼はできるかぎり人殺しは避けたいと考えていた。教会へ迷惑をかけないというのは二次的な理由に過ぎず、人殺しをするという罪を自分で背負いたくはなかったからだ。

本当に怒り狂っていたり、憎しみを持っていたのであれば、もう少し事情は変わるだろう。

しかし、ソーマにとってのクラウスとは、皮肉でもなんでもなく『殺す価値のない』存在だった。あんな、手応えも感慨もなく、殺した罪悪感だけを背負うなんて、罰として重すぎる気がするのだ。

殺された当人にしてみれば、到底納得のいかない主張だろうが、これは紛れもないソーマの本心である。

今回の事件を通じて、ソーマは実感と共に二つの教訓を心に刻んだ。

一つ、持ち物は盗まれないようにしよう。

一つ、人は殺さないようにしよう。

第7話　勇者の誓い（後書き）

全7話では、『章』と呼ぶにはちょっと短く感じるのですが、導入部はここまで。

次話からは、第2章となります。

第8話　勇者の求める勇者に相応しい生活

『勇者』とは何か？

神様直々に勇者と呼ばれてしまったソーマとしては、その命題から逃れることはできない。

『トラフロ』においては『かつて魔王を倒した英雄』を指す名称なのだが、そのような実績も持たず、似たような事例もない時と場所においては、称号として通用するはずもない。

一般的な用法に従うならば『勇気ある者』。

最初の一歩を踏み出した人物に用いられる言葉だが、日常的な会話においては、むしろ無謀な人間を揶揄する事例が多いのではないだろうか？　極端な話、蛮勇を奮うだけでも勇者と呼ばれるのだ。

名乗りとして扱うにも、人に呼ばれるのも、ソーマとしては非常に恥ずかしい呼び名だった。

……それはともかく。結論を言ってしまうと、勇者というだけでは食べてはいけない。

聖水教会では、まがりなりにも水神・アクアリーネゆかりの者という扱いを受けているが、それにあぐらをかいて居候生活をするのも外聞が悪かった。現状では評判が追いついていないとはいえ、のちのち『勇者』になるのであればなおさらである。

そんな事を考えたのも、先日の一件があったからだ……。

○

蘇生儀式を終えると、仮死状態にあった者は体力と魔力が全快した状態で目を覚ます。この時、容量が大きい者ほど回復に時間がかかってしまう。

非常に貧弱だったクラウスは、一日と待たずにあっさりと復活を遂げていた。
司祭とも協議した結果、ソーマは彼を無罪放免で解き放つことにした。なにぶん、ソーマが私的に死刑を執行してしまったという事実もあって、事を荒立てるのを避けたのだ。魔術師のジョルジュも同様である。
「この事は忘れんぞっ！」
という捨てゼリフを残して彼は館へ帰っていった。
ソーマに怯えた視線を向けていたのはご愛敬と言うべきか。

その日の夕方になって、ホンワード家から一人の使者が訪れた。今回の関係者としてソーマとアストレアも、司祭室での対面に同席することになった。
相手は、クラウスとカリアスの妹にあたるグロリアという女性だった。血筋によるものか、兄たちと同様に整った顔立ちをしていた。
赤毛が背中あたりまで緩いウェーブを描きながら流れている。
口元には微笑を浮かべ、ソーマに与えた第一印象は爽やかなものだった。
「今回は兄がご迷惑をおかけして申しわけありません」
第一声は謝罪からだ。この点では兄たちとまるで似ていない。
「俺の方がやり過ぎたくらいだから、謝罪されるとこっちが困るんだ。済んだこととして、水に流してくれれるのが一番ありがたいな」
ソーマの言葉に、グロリアは満足げに頷いた。
「ホンワード家も同じように考えています。どれだけ貴重な品であっても、盗み出そうと画策するなど外聞のいい話ではありません。今回の寄進には、迷惑をおかけした謝罪の分も含まれています」
彼女が持参した金貨が割り増しだったのはそういう事情によるものだった。
教会に負担をかけずに済んだのでソーマとしては非常にありがたい。

「これまでの行状を考えるなら、伯爵家を追放してもいいところなのですが、ソーマ様に懲らしめられたことで変わることを期待したいと思います」
にっこりとソーマに微笑みかけた。
「さすがは勇者様ですわ」
「ひとつ……聞いていいか？」
「なんなりと」
「勇者って呼び名はどこで聞いたんだ？　教会内でしか使われてないはずなんだけど」
「良くは覚えていませんが、……教会に到着してから小耳に挟んだのかも知れませんね」
彼女の笑みが崩れることはなかった。
教会内に別ルートの情報源を持っているのか、はたまた、クラウスの情報を全て入手しているいるのか、真相はわからない。
しかし、兄二人がいがみ合っているのなら、漁夫の利を狙うのが一番賢いやり方と言えるだろう。
陰ることのない彼女の笑みが、ソーマにはいささか腹黒く思えた。

○

地獄の沙汰も金次第という言葉もある。
今回は教会からも不要と言われていたし、実際には伯爵家から支払われたので問題とはならなかったが、一歩間違えば、金がないという理由でソーマは殺人犯となっていたのだ。
『トラフロ』ではアイテムのやりとりは普通に行われるが、お金の支払いは電子マネーのようにシステム画面上で決済される。アイテム扱いするには管理が難しいことや、数え間違いなどでトラブルになるのを防ぐためだろう。

所持金をここへ持ち込めていないのだから、ソーマが金の心配をするのも当然である。

「仕事を探そうと思ってるんだけど、冒険者ギルドはどこにあるんだ？」

教会の中庭で尋ねてみると、アストレアは至極真剣な表情で尋ねてきた。

「……冒険者ギルドとは何だ？」

「それすら無いのか……」

ソーマとしては落胆せざるを得ない。

「職人や商人のギルドならあるが、冒険者の組織というのは初耳だな。冒険のために必要な情報を集めるためのギルドなのか？」

『トラフロ』でお金を稼ぐ手段と言えば、冒険者ギルドで依頼を引き受けるというのが常套手段だ。

ＮＰＣから依頼される、要人警護や遺跡探索や魔物退治等。

他の冒険者からも、アイテムの入手依頼やスキルの指導依頼という仕事もある。

依頼主と冒険者の間に立ち、仲介を行う窓口となるのが冒険者ギルドという組織……であるはずだった。

「そもそも、仕事を探すのと冒険者にはどういう関連性があるんだ？」

実にごもっともな問いが発せられた。

冒険者というのは、文字通り『危険を冒す者』を指している。

あまり生産性の高い存在ではなく、人によっては道楽者という意味でこの言葉を使いかねない。この時代、『冒険をする』などという行動が仕事に直結するのは旅行作家ぐらいで、スリルを求めた金持ちが『冒険を楽しむ』のが一般的な感覚だ。

可能性としては、交易圏を広げるために未踏の地へ分け入るのも、冒険者の範疇に含まれるかも知れない。

改めて、ゲームのお約束に染まってることをソーマは自覚した。

「冒険者というのは、……何でも屋だな。魔物を狩って素材を入手したり、誰かを警護したりと、誰かの代わりに戦うのが仕事になる」
「猟師や傭兵だな。お前のところではそれを冒険者と呼んでいたのか？」
「そんなとこだ。俺には他の仕事はできそうもないし、戦いに向いているからそれを活かしたいんだ」
教会にも仕事はあるが、宗教関連の作業を除くと、雑用ばかりなのだ。これではさすがに宝の持ち腐れだろう。
「……どこも、個人的なつながりで仕事を請け負っているからな。この教会でも伯爵からの要望で警備に手を貸すこともある。素材を持ち込むつもりなら、商人ギルドや職人ギルドに行ってみるのが早いだろう」

○

ソーマが訪れたのは職人ギルド会館だ。間に商人を絡めると手数料が取られそうなので、直接職人側と接触してみようと考えたのだ。『トラフロ』でソーマが世話になったのは、武器や防具や消耗品の店ぐらいだったが、職人ギルドには業種別に小ギルドが存在しており、小さな物なら紙や本、大きい物なら家の建設まで扱っているらしい。
当然のようにソーマは、武器・防具の区画へ向かい、掲示板に張り出されている買い取りリストを眺めた。
表を埋めているのは、彼に見覚えのある文字や単語の数々。
以前にも言及したが、この世界で使用される言語は日本語だ。ファンタジーの世界設定にはそぐわないだろうが、『トラフロ』内でも日本語で統一されていたためソーマに違和感はない。
長さや重さなどの度量衡もほぼ同じだが、例外は金の単位である。

『トラフロ』ではお金の単位はC（コイン）と表されていたが、これはこの世界で言う銅貨一枚を指すようだ。
銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚と、百倍ごとに貨幣が変わる。古代文明の名残とのことで、これはどの国でも共通の仕様となっていた。
最少単位が銅貨一枚なので、例えばジャガイモ三個というように品物の数や量で調整することになる。ちなみに、ジャガイモやニンジンなど一般的な食材も、日本と共通した種類が流通していた。
その当たりのことは、アストレアに同行してもらい街中で直接確認している。
極端な話、存在する全ての動植物が現代日本とは異なる事態だってあり得たのに、同じ種類で同じ名前となると、ソーマでなくとも都合が良すぎると感じる事だろう。

「ちょっといい？　あのリストに載ってるより高い品は扱ってないのか？　銀貨で１０枚以上のやつ……」
呼び止めた職員にソーマが問いかけた。
「いえ、あの表は頻繁に使用する品を抜粋しただけなので、加工に使える素材の多くが取り扱い対象になります。先日は、ケルベロスの牙やサラマンダーの鱗なんかも買い取りました」
どちらも火属性と相性のいい素材だ。
「そういう希少素材の依頼を受けるには、どうすればいいんだ？」
「依頼と言うのでしたら……、実際に何度か納品してもらい、その実力と成果を確認した上で、ギルドの認可を受けてからとなります。通常は認可を受けた狩人に確保を依頼すると同時に、狩りの失敗に備えて、掲示板でも特別買取の告知が行われます。それを見た人達が独自に品物を持ち込み、査定で品質に問題がないと判断されれば、購入という形になります」
「そのやり方だと、物が集まりすぎないか？　期限は告知できても、必要な数が集まったことはどうやって知らせるんだ？」

「やはり、余ることも多くなりますが、事前に伝達する手段もありませんしね。そのかわり、無駄足というのもあんまりですから、少し値引きはしますがこちらで買い取りも行います」
「値引き？　告知した値段じゃ買ってくれないってこと？」
「相場というものがありますからね。こちらが必要数を確保した後では、余剰品となってしまいますし。猟師達も余計な荷物を持ち運ぶよりはいいと思いますよ」
「でも、単価が高い品なら次の為に保管しておくくらい、損にはならないだろ？」
「いえ……、集まりすぎても倉庫がふさがるわけですし、いつ使うかわからない品をいつまでも保管するのは難しいんです」
「職人ギルドでダメなら、職人の元へ直接持っていくというのは？」
「人によっては買い取ることもあるでしょうけど、必要数はギルドよりも確実に少ないですし、持てあますんじゃないでしょうか？職人が個人で動かせる資金は少ないですし、さらに買いたたかれる可能性もありますよ。ギルドならば登録している職人が大勢いるので、欲しがっている人を見つけるのも簡単ですし、代金の支払いは後にするよう融通もできます」
「ふーん……」

話の印象から判断する限り、職人ギルド側の買い手市場という感じだった。
職人側が素材を求め、冒険者がアイテムを持ち込む。品物が多ければ値切られる。
冒険者側が個として対応していては、この力関係が改善されることはなさそうだ。
あえて言及するまでもないが、人間なら誰だって自分が一番大切だ。自分が得られる利益を、対価もなく誰かに分け与えるということはまずない。
実力のある猟師は自分なりのコネを持っていて、それなりの顧客

をつかみ、それなりの報酬を得ているのだろう。
一握りの者が贅沢できている分、その他大勢にしわ寄せが行く。
組織というのは制約も課せられる反面、平凡な人間が寄り集まることで、より大きな相手と対等に交渉できる。人は、集団として行動することが何よりの武器なのだ。
職人ギルドや商人ギルド、さらには国だって発足した理由はそんなものだろう。
ソーマ自身が欲するように、冒険者ギルドの潜在的は需要はあるはずだった。
未来において、冒険者ギルドが存在することも考えると、組織が立ちあがることも歴史上の必然とソーマは考えている。
本来ならば、ソーマはこの地において飛び抜けた実力を持っており、聖水教会でも敬意を持って遇されているため、恵まれた側の人間と言えた。
しかし、小市民として育った経験が、どこにも属していないという状況への不安を抱かせている。
彼が、冒険者ギルドを欲するのは、収入源の確保やその必要性を考慮したからではなく、単に自分が安心感を得るという理由にあったのかもしれない。

第9話　酒場を訪れた勇者は酒を飲まなかった

日中、黄緑色の髪をした少年が酒場を訪れた。
１７歳という年齢で酒を飲むのはこの世界において問題視されないものの、若年者が酒場に足を踏み入れるのはなかなか難しい。
一般の食堂と違って、客層に少々問題があるからだ。
昼日中に酒場でたむろしている面々等はやはり癖のある者が多いわけで、少年に向けて好奇や嘲笑の視線を向けていた。
不機嫌そうに視線を受け止めるも、怯むことなく少年は客達の顔を見渡した。
少年の名はソーマといった。

その視線を好ましいなどとは思えないが、それを理由に喧嘩を売るわけにもいかず、ソーマはマスターの目の前のカウンター席へ腰を下ろした。
「何にする？」
ずんぐりとした体格に相応しい渋い声が、注文を問いかける。
「何があるんだ？」
「ガキなら、レモン水はどうだ？　銅貨一枚だ」
「……じゃあ、それで」
ソーマの実年齢は２２歳なのだが、ゲームに登録した１７歳という設定によって、外見にも影響が出ているらしい。顔立ちを幾分整えていたことも、幼さく見られる一因となっているようだ。
「ほらよ」
木製のコップに注がれたレモン水は、ほのかな酸味がアクセントとなって以外に美味かった。冷蔵庫など存在しないだろうから、井戸水ででも冷やしているのも評価できる。
「美味い」
「そうか」

愛想をどこかに忘れてきたのか、ひどくぶっきらぼうな対応だ。
「……ここだと、いろんな噂話がはいるだろ？　ちょっと、教えて欲しいことがあるんだ」
彼が寝泊まりしているのは教会であるため、良くも悪くも世俗とは一線を画している。教会相手では聞かせられない話もあるだろうし、情報が入ってくるのはどうしても遅れがちなのだ。
「多少はな。どんな話が聞きたい？」
「西の遺跡に多くのゴーレムが徘徊しているらしいけど、本当かな？」
教会で耳にした情報の、裏付けをするのが彼の目的だった。
「そう聞いている」
「ゴーレムの持つ魔石は高値なはずだけど、その割に職人ギルドへはあまり持ち込まれていないってのも？」
「ゴーレムは強いからな。普通なら避けて通る」
「強い……か。ストーンゴーレムだよな？」
「らしいな」
「……ふーん」
中途半端な相槌を打ったソーマに、マスターがつけ加えた。
「金にはなるだろうが、命あっての物種だ。無茶なことは考えない方がいい」
ぶっきらぼうな忠告も、マスターなりの親切なのだろう。
残念ながら、この時点で既に認識の齟齬が発生していたのだが。

「おいおい。背伸びするもんじゃねーぞ」
「ガキにはガキに向いた獲物があるだろうが。ウサギとかな」
カウンターでのやりとりを耳にした酔っぱらいが、嘲弄混じりに絡んでくる。
娯楽を欲していた彼等にとって、身の程知らずの小僧は格好の酒のつまみに見えたのだ。
「どういう人達？」

「向こうもハンターだ」
「……なるほど」
避けて通るしかなかったゴーレムを軽く扱われたことで、自分達までもが侮られたように感じたのだろう。
日中に酒を飲んでいるということからも、定時で働くような生活をしていない事がわかる。ハンターなどは昼夜兼行で働くことも多く、時間単位での生活サイクルではなく、日数単位での生活サイクルになる。彼等は、仕事明けや依頼待ちなのだろう。
「酒をおごってくれるなら、いろいろとレクチャーしてやってもいいぞ」
「そりゃいい」
ガハハハハと大笑いする一同。
酒場に置かれているのはいずれも丸テーブルで、同席する人数に制限はないため、多くても四人で囲むことが多い。客は大まかに分けて二グループ存在し、それぞれの席に着いた数は三人と四人だ。
「……」
どう対応するか考えているソーマは、無言のままだ。
「何とか言ったらどうだ？　おごる気になったか？」
そうは言いながらも、たかることそのものよりも、ソーマを困らせて意趣返しをするのが、彼等の目的のようだった。
「ゴーレムを倒した経験談なら聞いておきたい」
「……なにぃ？」
ソーマの返答を受けて、男達が怒気を立ち上らせる。
彼等を刺激した言葉を、わざわざソーマが蒸し返したからだ。
「子供の言うことだろう、笑ってやり過ごせ。お前も煽るんじゃない」
たしなめようとしたマスターに、客達が不満をぶつける。
「アンタは黙ってな。こいつは俺達の問題だ」
その言い分を受けて、マスターは不機嫌そうに口を噤んだ。
「ゴーレムを倒した人間はいないのか？」

「ゴーレムなんて関係ねえ。新顔ならそれなりの態度を取れよ」
「危険が転がっているのは、街の外だけじゃないんだぜ」
口々にソーマを威圧する。
彼等が体面を保とうとして、強気に出ているのはソーマにも理解できた。
うまい切り返しができれば良かったのだが、穏やかに場を納めるには謝罪する方法しか思いつかず、彼にはそれを選べなかった。実力がないと侮られるのも、気弱だと舐められるのも、どちらも彼にとっては不利益となるからだ。
ゆくゆくは冒険者ギルドを立ち上げるつもりなので、自らの強さを他人に認めさせておかなければ、発言権を得ることが難しいだろう。そのためにも、後々の禍根となりそうな弱腰な態度は取れない。
ゴーレムを狩ることで名前を売ろうと考えていたのだが、少しばかりその予定は早まることになりそうだ。
「じゃあ、ゴーレムじゃなく、あんた達の力を見せてくれるか？」
「……いい度胸だ。表へ出な」

○

街路に出た強面の一人が、腰の鞘から剣を引き抜いてソーマに突きつける。
これに応じて、マジックポーチから一本の剣を取りだしたソーマは、他の客の行動を見て拍子抜けした。
酒場には街路に面したテラス用の二卓があり、残りの六人は酒杯を手にしてそちらへ腰を下ろしたからだ。どうやら、仲間が勝つと思いこんでおり、生意気な新顔が叩きのめされるのを酒の肴にするつもりらしい。
彼等にしてみれば、ソーマという人物は新参者の小僧でしかない。

年少しか見えないし、名前や容姿を噂話に聞いたこともない。
「てめぇ、その剣をどっから出した？」
「……なんで持ってんだ？」
「よく見てなかった」
対峙している当人だけでなく、野次馬達も視線を外してたらしく、ソーマが剣を握った場面を見過ごしていた。
彼等は革袋一つのソーマが帯刀していないと思い込んでいた。『正々堂々』と言う言葉をあまり使用しない彼等の理屈では、剣を持ち歩かない方が悪いのだ。
この世界では些細なケンカでも剣を抜く。これは、オーラが身を守るため重大な事故につながらない、という事情に由来していた。
「……内緒」
「ふざけやがって」
軽く流すソーマの態度に、男は頭へ血を上らせる。
「あんまり早く終わらせるなよ～」
「じっくり時間をかけて、思い知らせてやれ」
ソーマの劣勢を期待して送られる声援。
「任せとけ」
踏み込んできた男の剣がソーマに振り下ろされる。
キン！
金属音は一度では終わらず、繰り出される都度、ソーマがそれを受けた。
「左手が軽くて、やりづらいな」
不満を零すソーマだが、彼のライトソードは漏れなく攻撃を受け止め続けていた。
「おいおい、どうしたどうした？」
「だらしねーぞ」
期待した場面を見ることができず、観客達からは無遠慮なからかいの声が飛んでくる。

「こいつ、生意気な」
苛立ちを見せる男に対し、ソーマは涼しい顔だ。
（……この前のザジは、やっぱり実力者だったんだな）
名も知れぬ相手と戦いながら、ソーマはそんなことを考えている。
一応、相手の力量にも察しがついたため、手こずっていると思われないようにソーマも攻撃に転じた。
受け主体の時よりも、さらに金属音のテンポが上がっていた。これは、ソーマの繰り出す手数が相手に勝っていることの証明でもある。
「……ぐっ」
受け損ねた剣先が体を叩き、男が幾度もうめき声を発していた。
「なにやってんだ！」
「真面目にやれよ。ガキに舐められるぞ！」
男の劣勢は、彼を応援する観客達自身のものでもあった。自然と男への声援も、厳しい口調に変わっていた。
「うるせーっ！　黙ってろ！」
怒鳴り返す男へ繰り出されるソーマの剣。
相手が体勢を崩したところへ、ソーマの打突が立て続けに命中して、男が後方へと倒れ込んだ。
この程度の相手ならば、ソーマはスキルを使用せずとも押し切れる。
そのことを、男の方でも察したようだ。
「お、お前等も手を貸せ」
うわずった声で助けを求める男に、仲間達もようやくソーマの実力を見誤ったことを理解していた。
「野郎っ！」
椅子を蹴立てた三人の男が、ソーマに挑みかかった。
元々、四人でテーブルを囲んでいた一団で、別なグループの三人は不満そうだが静観する構えのようだ。

敵の加勢を見て、ソーマは新たにポーチから剣を引き抜いた。右手のライトソードと対を為す、左手用のレフトソード。
魔法剣士は様々な武器を扱えるという特性を持つ。例外は筋力不足となる両手斧や大槌、器用さに欠けるため鞭や弓も除外される。これらについては彼の所持品にも入っていない。
先日戦ったザジがそうであったように、二属性を扱うには二刀流が非常に有効であり、魔法剣士にとっては非常に相性がいい。
彼が今装備したのは、魔物の両翼の骨から作り出された双剣で、その名を比翼の剣という。
一対多、あるいは多属性を相手取る時は、この剣が彼の基本装備となる。
二刀流に付随する命中率低下というデメリットが、この一対ならば補正が働いて適用されない。『トラフロ』のプレイヤー達は、二刀流がメインでなくとも、敵が多い場合に備えてこの剣を持ち歩く者が多かった。
彼がこの場でこの剣を選択したもう一つ理由は、両手剣に比べて威力が低いという点にある。一撃で与えるダメージが少なければ、相手に与える傷をコントロールしやすい。
つまり、殺す心配が減るのだ。
クラウスとの間で起きたいざこざは、ゲーム的に表現するなら小イベントでしかない。
しかし、現代日本の価値観を有する彼の胸には、『人を殺してしまった』という罪悪感が深く根を生やしてしまった。
クラウス個人への思い入れなどほとんど無いが、その影響を彼は長く大きく引きずることになる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8938s/

剣と魔法の隙間産業的勇者生活

2011年6月11日01時25分発行